

聖書箇所：ローマ人への手紙5章1～11節

説教題：失望することのない希望

1 生きるために必要なもの

かつてナチス・ドイツ軍が、ユダヤ人を虐殺するという歴史がありました。ある者はガス室で殺され、ある者強制労働に駆り出されました。すぐに殺されなかったとしても、飢えや病気、寒さによって体が弱り、次々と人が死んでいきました。そのような過酷な中であっても、最後まで生き延びた人たちがいました。特別にその人たちが健康であったとか、運が良かったということではありません。だれが死んでもおかしくない状況でした。それなのにどうして生き延びることができたか。あとで、そのことを調べた人がました。そして一つのことがわかりました。今は苦しいけれど必ず解放される日が来ることを信じて希望を抱き続けた人たちは生き延びることができた。しかしそうでない人たちは、生きる気力を失い、倒れていった。そこに大きな違いがあったのだと言うのです。人間が生きる上で、いかに希望が大切であるかを知らざる思いがします。

今朝の箇所では、まさにこの希望ということがテーマになっています。

2 アブラハムの信じていた希望

(1) 天の故郷にあこがれる

2節にこうあります。「神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」神の栄光を見る日。私たちが天の御国に入れられるときということです。その天の御国は、私たちの故郷であると言われます。

前回はアブラハムの信仰について触れま

した。そのアブラハムは自分の故郷を捨てて、カナンの地に導かれていき、そこで死ぬまで生活しました。彼は帰ろうと思えば自分の生まれたふるさとに戻ることができました。決して住みよい場所ではなかったのです。けれども、生まれ故郷に戻ろうとは考えませんでした。

ヘブル書によると、アブラハムは自分の故郷よりも、ずっとさらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたとあります。それがアブラハムの信仰であったと言われます。やがて自分は、もっとすばらしい故郷に戻ることができる。つらい生活ではあったけれども、そこに希望を置いて彼はカナンの地で生きていったとあります。

(2) 現実逃避なのか

信仰のない方がこのことを聞きますと、不思議に思うかもしれません。彼はありもしない夢物語を信じていただけの愚か者ではないのか。

昔のことになりますが、黒澤明が監督した映画に「どですかでん」というのがありました。その映画の中に、路上生活をしている親子が登場します。その父親がまだ小学生くらいの男の子に、自分の夢を話すのです。僕たちは将来どんな家に住んだらいいだろうか。そうだ、ヨーロッパ式の塙を巡らせよう。その塙の色は白でなければならぬ。家の形はこうだ、と言うように、次々とイメージをふくらませていきます。そうやって頭の中で、すばらしい家を建てて父親は感激します。間もなくして、あまりの貧しさから男の子が病

気になり死んでいく。父親は自分の貧しい境遇を受け入れることができず、夢物語の世界に逃げ込んでいたということでした。

アブラハムもこれと同じように、まるで夢物語かおとぎ話のようにありえない世界に逃げ込んで、現実の苦しみには目を向けようとしないう男に見えます。しかし、実際はそうではありませんでした。

あるとき、甥のロトが家族も財産も一切合切奪われ、ロト自身も捕虜になって連れ去られてしまうという事件が起きました。甥のロトとアブラハムは、決して仲の良い関係ではありませんでした。もしアブラハムが現実逃避型人間であったなら、ロトのことなど自分とは関係がないと言って、何もしなかったはずで、ところが彼は、ロト救出に出かけていきました。自分の下で働いている優秀な部下を引き連れ、自分がリスクを負って、もしかして死ぬかもしれないという危険をあえて引き受けていきました。そうして、ロトを無事に救出していく。

このことから、アブラハムが決して現実逃避するような人でなかったことがわかるでしょう。むしろ反対に、現実をきちんとわきまえる目を持っていた人でした。

そのアブラハムが、自分の故郷ではなく天の故郷にあこがれ続けていった。決して夢物語や、ありもしないようなユートピアを空しく追い求めるようなことではありません。彼にとって天の故郷とは、まだ目には見えないけれども確かに存在する現実でした。

あのアブラハムと同じように、私たちも目にはまだ見たことはないけれども、天の故郷に入る日を信じて、今大いに喜ぶことができると言われています。

「しかし」と考えます。どこにその確かな

証拠があるのでしょうか。目に見えるような証拠は何もありません。何もないのに信じなさい。もし本当に何もないのなら、こんなばかげた話はありません。それでも信じるというのはどうかしています。もちろん何もないわけではない。きちんとした根拠があります。そのことを考える前に、私たちに与えられるもう一つの希望について触れておきます。

3 患難から希望が生まれる

(1) 「頑張って忍耐しなさい」なのか？

パウロは、神の栄光を望んで大いに喜んでいますがと述べた後、3節でこう言っています。「そればかりではなく、患難さえを喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。」

聖書には、ときどき常識では考えられないようなことが堂々と書かれています。苦しみ希望を生み出す？ありえないと言いたくなります。それはたとえて言えば、水が低いところから高いところに流れるくらいに逆さまなことだと感じます。

どういうことでしょうか。「患難が忍耐を生み出す。」「ああ、そうか。苦しいことがあっても忍耐し続けなければいけないのか」と、私たちはこの箇所を考えるかもしれない。しかし、よく読んでみますと「患難が忍耐を生み出し」とあります。忍耐しなさいとは言っていない。むしろ、ニュアンスとしては、患難を経験することで自然に忍耐が生まれてきます。そのような言い方です。

もし、歯を食いしばって苦しいことに絶えなさい。苦しいときにも喜ぶべきだ。そんなことを言われたら、言われた方はつらいだけ

です。パウロは私たちに「がんばれ、負けるな、負けたら希望も失ってしまうぞ」と脅かしているのでは決してありません。

(2) 神が忍耐を生み出してください

パウロが言いたいのは、むしろこういうことです。私たちが患難に会うとき、だれだつてうろたえる。ときには、神は本当にいるのかと疑うことさえある。大切なことは、そのとき私たちはどちらの選択をするかにあります。二つの選択肢があります。

一つは、つらい現実からひたすら逃れようとすることです。だれでも、問題にぶつかると最初、逃げたいと思います。いっそ自分の心が麻痺して何も感じなくなればとさえ思うこともあります。しかしたとえ逃げたとしても、問題が解決するわけではありません。問題はそのまま残ります。先ほどの映画に出てきた路上生活をしていた父親は、このタイプの人だったと思われる。

そしてもう一つの選択肢は、逆につらい現実を受けとめようとしていく、そちらに向きを変えていくということです。アブラハムは、自分の生まれ故郷に戻ろうとはしないで、あえてカナンの地にとどまりました。問題だらけの土地でした。よそから来た者に対する冷たい視線があります。それでも、彼は一つ一つの問題に向き合っていくのです。

もちろん最初からそうできたわけではありません。失敗を繰り返します。いのちが惜しくなって問題から逃げ出したこともありました。けれども、神はそんなアブラハムを導きます。叱りつけたりはしません。神はアブラハムの弱さを知っておられます。彼の弱さに寄り添い続けます。あなたは問題に向き合うことを恐れているかもしれないけれど、大

丈夫だ。神であるわたしがあなたといっしょに歩んでいるのだから。あなたが弱くなったとき、わたしがあなたにできなくなっていることをするから。そのように語り続けていくのです。

そんな失敗やいろいろな経験を重ねるうちに、アブラハムは徐々に苦しみに向き合うことを学んでいきます。自分だけが我慢して忍耐するのではない。神もごいっしょに、自分の苦しみを理解し、苦しんでくださっている、そのような神のあわれみを知ようになります。神がごいっしょにくださるので、忍耐することが出来ます。神がこの苦しみをとおして自分に関わってくださるので、神によって自分が造りかえられていきます。パウロはその様子を「忍耐が練られた品性を生み出し」を表現します。

(3) 神が希望を生み出してください

私達もアブラハムと同じようなところを通って学んでいきます。苦しみはつらいことだ、避けたいことだと、いつも後ろ向きにしか考えられなかったけれど、そうではない。これほど神が私のためにしてくださっていたのだから、これから先のことについて、何も心配することはない。そのような確信に変えられていきます。目には見えないけれど、希望が確かなものになっていきます。

どこにも、自分で頑張って忍耐せよとは言っていない。努力して品性を作り出せとも言っていない。必死になって希望を持ち続けよと命令しているのではない。すべては私たちといっしょに苦しんでくださる、神が与えてくださるものであった。そういうことです。

4 神の愛が注がれているのだから

パウロはそこでとどまらず、もう一つ念押しをします。5節。「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

その神の愛がどうやってわかるのか。ただ心に感じなさいとは言ってません。キリストが私たちのために死んでくださったのは、いつであったのか、そのことを思い出してみなさい。そうすれば、神の愛がどれほどに深いものかを、あなたがたは理解できるはずですよ。そんな順番で語ります。

キリストはいつ死んでくださったのですか。私たちがまだ罪人であったときに私たちのために死んでくださったのではなかったのですか。つまり、私たちが、信じるずっと以前に。私たちが自分の好き勝手な道を歩んでいたとき、私たちが罪人の生活にふけていたときに、キリストは死んでくださったのではないか。悪いことをしている人のために、だれが進んで死ぬだろうか。そんな人はいない。けれども、神はそうしてくださった。ひとえに私たちを愛するが故にそうしてくださった。

神がそれほどに私たちのことを愛していただくのなら、どうして私たちのことを今無関心でいられるのでしょうか。私たちが苦しんでいるのに、知りませんと言えますか。私たちがどこに向かうかわからないときに、後は好きにしてくださいと、放っておくはずがありますか。むしろ、いつも私たちのことを心配し、最善のことをしてくださるはずではないですか。私たちが例え死んだとしても、やがて行くべきところを用意してくださるはずではないですか。キリストが私たちのた

めに十字架で死んでくださったということは、そういうことを現しています。

希望を全く失ってしまったなら、私たちは生きることはできません。例えあらゆるものが満たされていたとしても、希望がないのなら、何の喜びもありません。

しかし聖書は語ります。私たちは、この地上でどんなひどい目に会おうとも、どんな苦しみにも会おうとも、涙が尽き果てるほどに悲しいことが起きたとしても、絶対に希望は取り去られない。私たちには希望がある。神が私たちのために十字架でいのちをお捨てになられるほどのことをして下さったのだから、大丈夫。それが証拠だ。それが私たちに与えられた、契約書だ。神のからだに裂かれる、そのようにして作られた契約書です。神が流された血のサインがしてある契約書です。この契約は絶対に破り捨て去られることはない。だから、この希望は失望に終わらない。

時には希望を失うように感じ、喜びも無くなる時があります。でも、神は私たちのうちにおられ、希望を与えようとされています。喜びに満ちあふれるようにと私たちを励まして下さいます。